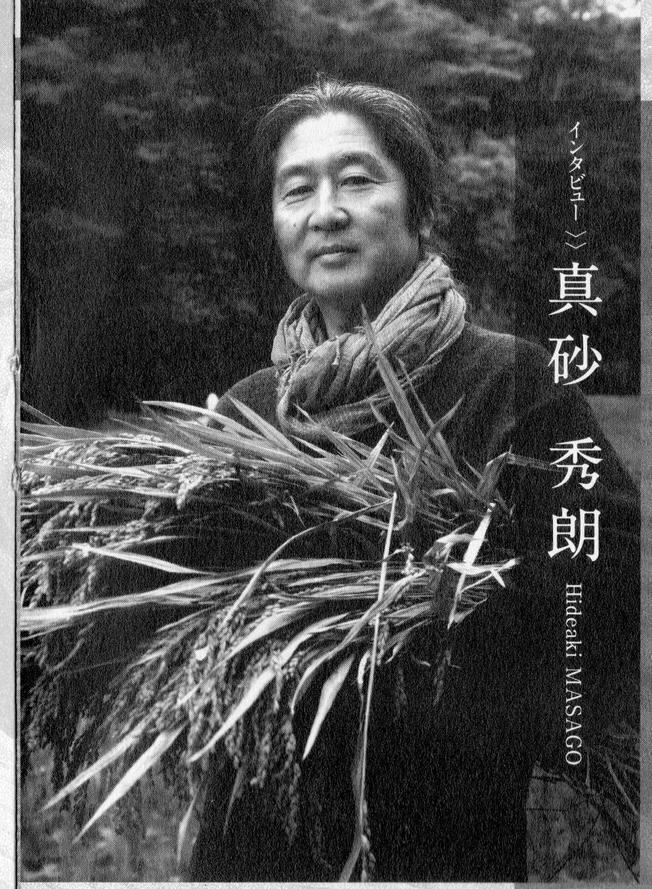
自然との調和とは。アイデンティティを求める中でみえてくること。

インディアンフルートなどの民族楽器や水彩画、版画などのビジュアルアートで表現することで、世の中のネイティブと呼ばれる世界と繋がるアーティスト、真砂秀朗さん。11月に真砂さんの新刊『畔道じかん』と新譜『真南風(まーぱい)Ⅱ』が発売になった。どちらも自然に寄り添うことの意味を教えてくれる作品だ。両作品にかけた想いを聞くために、神奈川県葉山の自宅と田んぼをたずねた。

文・渡辺亮　写真・片岡一史



インタビュー〉〉真砂秀朗 Hideaki MASAGO

神や自然に感謝する島から風にのせた祈り。

真南風(まーぱい)とは初夏を告げる南南西から吹く風であり、幸せを運ぶ風とも言われている。

『真南風Ⅱ』は沖縄県西表島の唄者、石垣金星さんらとコラボレーションした12年前のアルバム『真南風』の続編。前作に続き、西表島に伝わる伝統的な古謡や波、風などの自然音をベースに作られている。

「テーマを特に立てずに制作のために島に入って、田んぼの脇の小屋で録音を始めようとした時に、ちょうど3・11の黙祷のサイレンが鳴り響いたんです。導かれるようにインディアンフルートを吹いていると、窓越しに田んぼに舞い降りるシルサヤ(白鷺)の姿が目に入った。シンクロしたというか。そしてこのアルバムが〈祈り〉というテーマになっていったんです」と話す真砂さん。

前作と異なるのは、金星さんの歌声のほかに祖納集落の西表小中学校の子どもやTINGARAのつぐみさんの歌声が入ったことで、アルバム全体が世代を超えたものになっているところ。

「金星さんは西表島でずっと田んぼを続けています。自然と寄り添って生きること、土地の文化をつなぐことを10数年も前から子どもたちに教えてきた。アルバムの最後の曲『川ぬ端さぬアブターマユングトゥ』は人間の命もさまざまな生き物の命も、島とともにいつまでもありますようにと神様にお願いした歌。これを前作では金星さんが歌っているけど、Ⅱでは子どもたちが歌っているんですよね。金星さんが教えてきたことがようやく形になった」

金星さんが奏でる島唄に合わせる真砂さんのインディアンフルート。真砂さんはこれまでさまざまな民族楽器と一緒に演奏してきたが、琉球音階でインディアンフルートを吹くことも真砂さんの中では自然なことだったと言う。

「民族楽器同士は、どんなものでもコラボできると思っています。もともと人間はどの民族も同じ姿だった。プレインディアンやプレアフリカン、プレジャパニーズは、〈地球人〉というか。世界各地で残っている岩絵などはその証。その頃の時代は、〈地球文化圏〉。その後、地球はずっと分化の方向に変わっていった。そして今はまた統合に向かっている。インディアンフルートはその流れの中で世界を繋げられる楽器だと思っています」

プレジャパニーズとしてのアイデンティティ。

前作のアルバム『真南風』ができた頃に真砂さんは葉山で田んぼを始めた。田んぼと向き合う中で感じた想いを2005年から本誌の連載『畔道じかん』で綴っていった。

「プレジャパニーズ。それは縄文人。最新の考古学では日本の稲作として陸稲が五千年前には、水稲は三千年前には行われていたことがわかっています。そう考えると、縄文時代後期にはすでに里山の中で暮らすという生活があったということ。それはおそらく太陽信仰の母権社会。日本人のアイデンティティはその頃に形成されたと思うんです。文明が壊れてきているように見える今、これからオルタナティブな文化を作っていくために、僕たちのアイデンティティを深めていくこと。それがこの本のテーマです」

一般的には、縄文時代は狩猟採集民族として位置づけられており、生活の糧という意味で現代と繋がる部分は少ない。でも日本人のルーツといわれる縄文人が自然と調和した里山を形成していたのなら、ルーツに回帰する意味合いがより大きく、より身近に感じてくる。

「バベルの塔が崩壊する時、神様はまず人間の言葉を通じなくさせた、という神話があります。現代は情報が多いのに心が通じ合えていない。例えば原発、みんなが同じテーブルで話せない。話しても通じてない。それは近代文明が行き詰まっているという兆しに見えます。日本人は生活の根本がプレジャパニーズの文化でできている。本音は縄文文化で、近代文化は建前。その建前が壊れてきたら、本音をもう一回、検証して分かち合いたい」

『真南風Ⅱ』と『畔道じかん』。音楽と本の違いはあるが、どちらも自然との調和を表現している。そして自然と繋がる場として、田んぼの存在がある。3・11の後、この時代の中でどう地に足をつけて生きていけばいいのか模索している人が多い。自然と調和すること。神を敬いながら人も生き物も地球もひとつであることに気付くこと。私たちの身近な田んぼに寄り添うことでこれからの社会が変わるかもしれない。そんなことを真砂さんは伝えたいのではないだろうか。

PROFILE

独自の音楽表現とともにビジュアルアートにおいて創作活動をしている「絵と音」のアーティスト。世界各地のネイティブカルチャーとの関わりから、人間の原点にある自然と折り合う感覚を作品の中に組み込み、現代社会へ還元している。

CD

『真南風まーぱいⅡ』
石垣金星・真砂秀朗・遠藤昌美
2,500円
発売元 Swith Records

神の宿る島ー沖縄・西表島。祖納集落に生き続ける古謡とともに、島で収録された風・波・鳥たちの音、そして子ども達の歌が重なる。神を崇め、先祖を敬い、自然に感謝するこの島から南の風にのせて祈りをおくる。

BOOK

『畔道じかん』
真砂秀朗著
2,520円
発行所 株式会社テン・ブックス

里山の谷津田で続けてきた冬水・不耕起田んぼ。そこで培われる気付きは遠く縄文の世界へ繋がる。近代文明のひずみを受けて私たちが帰着するべき場所とは?『88』連載のエッセイに追記した渾身の著作。

LIVE

『ひとつのいのち』
「畔道じかん」出版記念コンサート
日時:12月5日(水) open/18:30 start/19:30
会場:CAY【東京都・南青山】　料金:前売3,000円　当日3,500円
出演:真砂秀朗・Kaz・野口暁